昭和十五年一月廿八日發行（毎月一回）
（振替口座東京六七一三五番）
編輯兼發行人　中曾根正三郎
印刷人　澤田文雄
印刷所　學園印刷所
發行所　財團法人　立教學院

立教學院學報

第一號

新年の辭

立教學院總長　シ・エス・ライフスナイダー

國民的緊張の當今の重大時局にあつては、凡ての忠良なる市民又『神と祖國の爲』といふ立教の理想に忠なる我が學院の全學生・全校友は、必ずや犧牲の精神をもつて新年を迎へるに相違ないと我儕は信ずる。

犧牲の精神といふ此のうちに含む意味は極めて高貴なものだ。此は社會の弱者の利福鴻益のために我が多くを「與へん」とし、その爲に多くを「負はん」とする決意を意味する。同胞を高め、同胞を力づけるために我が一身上の便益慰安を割讓することを意味する。殊に、大君と國とに一切をささげ、我が生命をも惜まずに國家的聖戰の目的貫徹のため第一線に出て奮闘活躍してをる我が同胞のために以上の決意を斷行することを意味する。

嚴たる物資の統制、凡ての精神的なものの深き涵養、眞の靈的な威力の發揚、是等が必要な事は日本の有史以來、今日の如く痛切に感ぜらるる時は未だ曾て無い。

我が學院は新しい年頭に立ちて、忠なる全學生・全校友に呼びかけて此の大責任を果さしめんと欲し、此の大特權に與からしめんと欲する。榮光ある立教の校旗に輝やく偉大な理想が――『神と祖國の爲』といふ此の偉大な理想が、皇紀二千六百年紀念の此の年に際し全學生・全校友の生活に於て實現せらるべきことを促がさんと欲する。

此の千歳一遇の秋に當り諸君の祖國は、諸君が新東亞建設のために一心合體しての諸君の協力を要求する。諸君の母校も亦等しく諸君がその爲に決然たる覺悟を以て共の招致に應じて喜んで、奉仕と犧牲を行はんことを要求する。天祐は諸君に負はされてをる任務を成功を以て果さしむることを我儕は確信する。

皇紀二千六百年を迎へて

立教學院校友會長　小林彦五郎

待ちに待つた偉大な皇紀二千六百年が遂に來た。眞に無量の感慨である。

頭を回らして崇高な我建國の古を仰ぎ、歴代列聖の聖業を長み奉ると共に、自ら省みて二十六世紀の間、流れ來つた大日本國の豊富無双の文化を享樂し、更に又た列强の國に、光輝ある地位を占め得た大國民の一人たる誇と悦とを以て、此盛時に逢ふた幸福を思ふて、唯々萬古搖ぎなき皇室の鴻恩に感泣し、又た深き上天の恩寵を感謝せざるを得ない。

立教學院は實に此意義深い二十六世紀の中最後の輝かしい世紀の初めに生れ出たのである。創立以來六十餘年、皇國の教育に相當の貢献をなし得たことは洵に光榮であつたと謂はねばならぬ。

思ふに、立教學院は其主義と、其特種の存在とよりして、中學としても大學としても、過去六十年間、決して順境のみの連續ではなかつた。

しかし今や其基礎は固く据えられた。今より後堂々たる歩武を以て我國の教育界に邁進し得ることを確信するものである。

不肖圖らずも今回校友會長の任に當ることとなり、老骨其任にあらざるを感ずることが頗る切である。たゞ我母校を愛することに於て人後に落ちないことを斷言し得る。偏に壯歳有爲の副會長兩氏の智德に信賴し又役員及會員諸氏の後援によつて母校勢援の務を果したいと存ずる次第である。皇紀二千六百年の佳歳に方り、若し立教學院が有意義の企をなすであらうならば、校友會員が悦んで之に參加するであらうことを信じて疑はないものである。

終に、私は此光輝ある年の年頭に於て、立教學院及校友會員諸氏の上に謹むで上天の祝福を祈り奉る。

新年の挨拶

立教大學學長　遠山郁三

「一日の計は晨に在り一年の計は春に在り。」潑剌たる意氣と愼重なる考慮とを以て私共の天分を竭し義務を完うすべく凡ての計畫を立てねばならぬ年頭の今、私共は切に新春が曠古未曾有の意義深きものなるを覺えるのである。蓋し意外の大戰となつた支那事變は既に征戰第四年に入り忠勇なる我將士の粉骨碎身により皇軍の威力をして益々赫々たらしめ東亞新秩序なる劃期的大業は漸次歩武を進むるの秋、恰も一億國民の齊しく景仰せる皇紀二千六百年の春を迎へたからである。

本邦の文献に於て紀元尊重の大義を特筆したもの〻多いのは勿論であらうが百年前、天保十一年の新春に當り藤田東湖先生は、鳳曆二千五百春、乾坤依レ舊韶光新、今朝重レ感緣ニ何事一、便是櫪原即位辰。と詠じてゐる。併し公に制定されたのは明治五年改暦に際し神武天皇御即位の年を以て紀元元年と定められたのである。顧ると肇國以來今日まで實に悠久の春秋を歴みしたるものと謂はねばならぬ。其間幾多の波瀾曲折を經來り非常の國難に遭遇したことも亦一再ではなかつたが、我邦は未だ嘗て少しも之に屈した事なく、常に協力一致して之を克服し來り、御稜威の下に盡忠報國の赤誠によつて今日の隆盛を見るに至つたのである。惟ふに國難に遭ふ時愈々益々擧國一致の實を擧ぐるのは君臣一體忠孝一本の國風に淵源するのである。此非常時に此記念すべき歳の春を迎へたのは當に日本帝國の傳統的精神を振起すべく天の啓示と謂はねばならぬ。

如今支那事變の終局は未だ容易に豫知し難きものがある上に、世界狀勢は正に謂ゆる複雜怪奇を極めてゐる。眞に肇國以來の大難局に直面してゐるが我國策の向ふ所は炳として明かであるから此線に添ふて堂々突破すべきである。蓋し東洋の安定と世界平和の確立と人類の福祉增進とは私共の立場からすれば先づ以て日滿支三國の緊密な提携を以て始められねばならぬからである。神武天皇は「八紘を掩ひて宇と爲さむ」と詔し給ふたが、之は人は皆一大家族であらねばならぬといふ大精神を示し給ふたのであつた、斯る宇宙の大生命を國の心とせるものは世界は廣く萬國は多しと雖、我邦を措いては外にはないのである。此精神が凝つて萬邦に比なき國體となり、萬世一系萬古不易の道をなしてゐる。此精神が東洋延いては世界に徹底する時始めて平和と福祉とが招來せられるであらうが、之には非常な困難の伴ふことは固より當然である。而かも私共は如何なる障碍も斷然排除克服し如何に長期に亘つても堅忍不拔、不屈不撓の固い決意を以て高遠なる大目的達成に向つて邁進し以て天壤無窮の宏謨を翼賛し奉らねばならぬ。

爰に年頭に當り恭しく聖壽の萬歳を唱和し奉り、護國の英靈に感謝を捧げ、出征將士の武運長久を祈念しつ〻、敬愛する同僚各位並に學生生徒諸子と共に重く貴き責任を持てることを明確に認識して自重自彊自愛し、充分の覺悟を以て銃後の固めをなすことを誓ふのである。之れが爲に私は更に切に諸君が近く將來の日本を負荷し人の師表となるべき位置に在ることに鑑み肇國の精神に邁へる立教建學の精神たる神と國との爲に滅私奉公誠心誠意精進せられ各自其本分を竭し德を修め、學を勵み、體を練り、高潔の情操を養ひ以て輝しい偉大な新年を有意義に迎へられんことを希ふのである。

新春所感

立教中學校長　帆足秀三郎

聖戰下三度の新春を迎へ、而も紀元二千六百年の新春を祝賀するにあたり、我等教育者として決意を要するもの多々ある事を覺える。

明治維新以來、西洋の文物を受入れ、我邦の開發に全力を靈せる戰士を社會に送り出した教育界が、過去を反省する時に、邦家のために重大なる任務を遂行し來つたとはいへ、更に深く如何なる軌道に乘つて、その使命を成就し來つたかを考へるに確に個人主義的な人物の養成に、日も足らざりし傾向の著しきを思ひ、吾人の誤つた行動を懺悔せざるを得ない。邦家の成立、その國柄は、當然、滅私奉公的な人物の所産を主眼とすべきであるに、到る處、私利、利慾の輩の横行を見たのは、一に教育家の罪と謂ふも當然である。

教育家の任たる、國家社會の將來を負ふに足る人材の養成にある以上國家社會の將來性を看破し、以て教育すべきにあるに拘らず、往々にして時勢に阿り、自らの抱負の實行に努力せざることあれり。教育者は富もなく位置もなく、而も世の木鐸として社會に所信を斷行する時に、教育家たる天職の歡喜は、湧然として生ずるのである。支那事變に際し國家的に有用なる幾多の人材を要する時、人物の缺乏の聲を耳にし、且之を憂ふるは、實に吾人の過去の誤謬を指摘せられたやうな感を持ち、赤面の至りに堪えない。被教育者の希望と、一般社會の要望に動かされて出世第一主義を高調し、所謂秀才教育の美句に沒頭し來つた吾人の過去は小人物的、小才子的教育を以て事足れりとしたのではなからうか。

今日の日本の要する人物は、今日の教育界の產出しつ〻あるが如き人物にあらずして實に滅私奉公を實行するの人である事は論を俟たない。然らば滅私奉公的な人物の養成は何處に於て爲し得るか。我等立教學院に在つて、重大なる任務に當つてゐる者は玆に三省を要する。元來本學院の設立の目的たるや、犧牲獻身の精神を敎へ、博愛、信義の美德を高調するにある。然るに吾人は往々世間の潮流に動かされて、世間風の才人を敎養し、所謂自己主義的なる人物を社會に相當に送つてゐた事實を顧み、吾人の不明と過失を悔ひ、今後に於ける我等の態度を一新して邦家のために更に有爲なる人材の養成に努力すべきであると思ふ。新春を迎へ、過去の誤謬を清算して、吾人の行路を的確に認識し、一路邁進すべきであると思ふ。

米國から洋書四千冊

圖書館着々充實

益々複雑怪奇なる世界情勢の最中に、我國と特に密接なる關係を有する米國の政治經濟一般に關する研究機關として、昨年本學内に設置されたアメリカ研究所は、去る十一月カネギー、エンドウメント、フオア、インターナショナル、ピースの理事會で、立教大學圖書館をその寄託圖書館に決定した事に依り、その具體的活動の第一歩を踏み出した。從來カネギー、エンドウメントの日本に於ける寄託圖書館は大學圖書館としては東京帝大と臺北帝大のみであつたが、今回新たに本學も之に加はつた譯で、今後　ピースに於ける新刊は勿論、過去の全出版物も續々と寄贈される事になつたのだが、この中には同ピースが世界各國の權威を集めて編纂した『歐洲大戰の社會經濟的研究』の數百冊の貴重な書物や、入手不可能な國際關係の文書等、期待大なるものも多く、又今次大戰に關する優秀な研究、記錄も以後續々發行を豫想されてゐるが、之等あま多の書物が本學圖書館の書架を飾る偉觀も遠からず見る事が出來やう。これに依り本學圖書館が一段とその重みを加へた事は云ふまでもないがこれ等數千冊の書物は現在の書庫には入り切れず、目下圖書館の增築等も考へられてゐる。

× × ×

多年圖書館長として盡力されたスバックマン教授の後任としてオーバトン教授が館長事務取扱に、經濟學部の山下教授が副館長に就任されたがこの新陣容の下に内容整備の一歩を踏み出した圖書館は次いで昨年十二月新刊圖書即時閲覽制を實施に移した。從來、購入された新刊書は分類カード作製記帳等の必要過程を經た後でなければ、一般學生の閲覽は許可されたかつたのであるが、それ等事務上の不便を敢へて忍ぶ圖書館側の英斷により、此の新制度が實施せられる事になつたのである。これに依り新鮮な知識を渇望する學生の望みも入れられる事になり、圖書館當局も、近來下向の傾向にある圖書館利用者數も、これを期として漸時上昇に好轉する事を期待されてゐる。

躍進する研究室

經濟學部研究室

最近躍進を續ける經濟學部研究室は非常に手狹を感ぜられ、來學年早々改築されることに確定した。その結果は、階下に現在の資料室の他に二階の演習室が移り、亦教授室が增加するとのことである。

會議室では、教授會や教授の研究會を開く外、コンモン・ルームとして教授の親睦を計る爲に利用され、毎週金曜日には午餐やティー・パーティが開かれてゐる。

演習室は三室で、此處は學生々活に於ける學問的雰圍氣の最も濃い所といつてもよく、各學生は教授と膝を交へて、勉學に勵んでゐる。亦教授によつてはティ・パーティや旅行をして、和氣藹々の中に學問を樂しんでゐる。

資料室には全國の各官廳、銀行會社、學校、研究所等で發行される定期、不定期の資料が網羅的に蒐集されてゐる。定期資料の總數が昨年十一月現在、内外合せて五百餘種に上り、不定期資料は八百五十部餘、其他、辭典、年鑑等、これらが各々整理されて夫々の書棚に納められて、カードによつて直ちに檢索されるように整備されてゐる。なほ來學年からこの資料室も一般の利用に供せられるようになる筈である。

研究室の機關誌である『立教經濟研究』もすでに二回「統制經濟特輯號」として刊行され、非常な好評を博したが、第三號も同特輯號として、本年一月中には刊行される豫定である。

英文學科研究室

こゝでは、隔週の火曜日に教授、校友、或は在學生の中から志望者が選ばれて研究發表を行つてゐる。又アメリカ文學を中心とする文獻が約五百種藏されてゐるのは此の研究室の誇りである。なほ機關誌として『英米文學』がある。

哲學科研究室

この研究室には、哲人田中王堂先生の思想を研究する爲の王堂會が設立され活躍してゐる。

史學科研究室

此の研究室は、教授室の外に考古學標本室・圖書室を有し、機關誌として『史苑』を有してゐる。

立教健兒の意氣高し

冷雨の中に査閲擧行

昭和十四年度の査閲は昨年十月廿五日、冷雨降りしきる中を査閲官植野少將閣下臨席の下に本學構内に於て行はれた。

なほ當日は、豫定では、代々木練兵場にて施行されるはずであつたが、種々の都合により本學に於て行はれた。

當日は朝來からの雨で、狀況は相當惡かつたが、興亞の意氣に燃ゆる立教健兒は、一年の鍛練の花咲く今日と、マントも着られずに顏に垂る雨を拭ひもせず、學生の一擧手一投足を見つめる査閲官閣下の姿に感激しつゝ、マーチと共に、力强き一歩を踏み出し、豫科、本一、本二本三と講評良好の中に今年度の査閲を無事終了した。

本年度に於ける査閲の目標は學生の疲勞困憊に忍へ得る體力を養成するにあつた。なほ學校教練實施十五周年にあたり東亞新秩序建設の段階に沿つて學校教練の目的は軍事豫備訓練にありといふことが明確にされた。

第三學期行事

學部

二月一・二日　三年語學再追試驗
三日　三年授業終了
七日―十四日　三年卒業試驗
廿一日　一・二年授業終了
廿六日―三月五日　一・二年學年試驗
三年の追再試驗
三月十六日　卒業式

豫科

二月三日　譯傳競走（振勵會主催）
十一日　建國祭閲兵式
三月七日頃　學年試驗開始

宮川實教授新任

―經濟組織論復活す―

昨年三月辭任された大河内一男講師の後任として、先頃、前和歌山高商教授宮川實教授が來任された。

同教授は明治廿九年山口縣に生れ（四十五才）一高より東大法科に進み現在東大法學部の宮澤俊義教授とは同期の大正十二年卒業である。次いで經濟學專攻のため京大經濟學部研究室に入り、河上博士に師事して研究を積まれる旁ら同志社大學に講師として教鞭を取られたが、後大正十四年和歌山高商に移り、爾來同校にて原論及び經濟史の講座を擔當、昭和十四年に至つた。その間昭和五年文部省より獨乙留學を命ぜられ、理論經濟學及び統計學を研究。七年歸朝されたが、此間の獨乙は所謂世界恐慌の最中でナチス政權成立の直前であつた。宮川教授は本學に於ては經濟組織論及び英語經濟獨乙語經濟等を擔當されるが、これで昨年中缺講であつた組織論も新たなる師を得て復活された譯で、今後同教授の進歩的理論と豊富な學殖に期待される處大である。

――躍進途上の經濟學部研究室に同教授の新任の感想を叩けば

『立教の田邊さんや河西さんとはもとからの知合で、特に山下教授とは學生時代からの知己です。立教の學生はすなほだと云ふ評判を聞いて居ましたが、今度こちらへ來て私も同感です。それに今迄專門學校に居た關係か、本校には仲々落着いた雰圍氣がある事を特に强く感じました。又研究室の立派なのには驚き、大變嬉しく思ひました。私もこれからは此の充實した研究室に腰を据へてウンと勉强したいと思つて居ります』

人事異動

學部

中村進午博士

憲法の講座を擔たれてゐた博士は、兼ねて胃潰瘍で療養中のところ昨年十月廿一日逝去された。博士は明治廿七年東大獨法卒業、歐洲留學の後、東京商大教授となる。

奥山貞二郎講師

昨年四月より商品學を講ぜられてゐた講師は、不幸にも病を得て、去る十一月十五日逝去された。

佐藤　基講師

故中村博士の後任として昨年十一月より憲法を擔當。同講師は大正十二年東大法科卒業。大藏省を經て、昭和十三年厚生省保險院總務局長に就任して現在に至る。

豫科

佐藤東四郎教授

昨年五月廿八日急性肺炎を患ひ、忽然他界せられた。擔當課目は英語。

鍋島能正教授

故佐藤教授の後任として就任された同教授は昭和九年本學英文科卒業の新進氣鋭の教授。

J・H・サトクリフ教授

昨年九月に就任した同教授はケンブリッヂ大學出身の少壯教授。

R・R・シモンズ教授

ニュー・ハムプシエーア大學及びウイチタ大學（カンサス州）卒業。九月就任

飯田　豊教授

永年國語を擔當されてゐた同教授は、今回健康を害されたため、惜まれつゝ辭任された。

中學だより

▽體力テスト行はる

昨年十一月A、B、C三級よりなる體力テストが全校生徒に行はれた。その成績如何よりも、生徒の體位向上施設の完備が先決問題とせられてゐる。

▽一路貯蓄報國へ

學校市による貯蓄運動の第二回調査は去る十二月五日各組主任により行はれた。現在までの總額七千餘圓に上り今學年度中には一萬圓を突破する見込み。

▽校友小林濤一氏無言の凱旋

ノモンハンに於て名譽の戰死を遂げたる小林濤一氏の遺骨は昨年十一月廿四日上野驛に到着五年生一同は池袋驛に出迎へ英靈に謹んで默禱を捧げた。

▽活躍せる柔・劍道部

東京府體育會主催の府下中等學校段別柔道大會に於て島村初段（四年生）優勝す。同じく學年別劍道對校試合にも第四學年はよく第三位を占めた。

▽湯澤へスキーに

教授連とOB及び學生よりなるスキー同好會は體位向上を目指して新春早々湯澤に。

論文

いかにして學生時代を過すべきか

河盛好藏

「いかにして學生時代を過すべきか」について感想を述べよといふ編輯者の命令である。しかしこのやうな課題に對して正面より答へることはなか〳〵容易ではない。それは「いかにして人生を生きるべきか」といふ問に答へるのと一般だからだ。元來、人に向つて處世法を說く資格のある人間は、偉大なる生活者でなければならない。最も切實に人生を活きた人間の言葉でなくて、どうして人の心を動かすことができよう。學校時代の秀才から、そのまゝ何の苦勞もなしに大學の教授になつた男が（斷つておくが、僕自身を指すのでは勿論ない）それぞれに生活上の苦勞を背負つてゐる學生たちを集めて、「僕等の學生時代には」といふやうな勝手な熱をあげた所で、聞かされる方にとつては片腹痛いだけの話であらう。僕自身、自分の學生時代をふり返つてみて、お前は切實に、誠實に、悔ゆることなくその時代を生きたかと問はれても「然り」と答へる自信は殆んどない。從つて僕が以下に述べることも、よく忠告ではなくて、むしろ苦い悔恨の告白であるかもしれぬ。僕は人に誇れるやうな學生時代を有たなかつたのだ。

考へてみると、僕等の學生時代、特に高等學校の時代は、今からみるとまるで夢のやうに長閑な時代であつた。近頃の學生諸君と違つて、僕たちは世間の人々の嚴しい監視から免れた一種の治外法權圈體であつたから、深夜酒氣を帶びて放歌高吟して街を歩いても何人にも咎められなかつた。學校の教科書から無愛ものや自由主義的思想はまだ削除されてゐなかつたから、僕たちは教室で「ポールとヴイルジニー」を讀み、アナトール・フランスを讀み、またジイドを讀んだ。僕たちは對一高野球試合に熱狂し、また暇があれば集つて人生を論じ、文學を語り、戀愛を談じた。云ふまでもなく僕は昔を懷しがつて、こんな事を書いてゐるのでは決してない。それどころか、もしあの時代に東亞百年の將來について遠大な計畫と高邁な識見を持つた偉大な政治家が居つて、僕たちをその方針のもとに鐵の如く鍛へて置いてくれたなら、こんどのやうな事變は決して起らなかつたらうと思ふのである。

しかしこのやうな呑氣な時代は勿論永くは續かなかつた。僕たちが大學へ入學した頃は大震災に續く深刻な不景氣が日本を襲ひ始め、殊にその頃から漸く熾烈になり始めたマルキシズム運動の嵐が、學生たちの純眞な頭と心とを容赦なくゆさぶつた。當時、僕たちの周圍にゐた秀才たちが、蹶を接するやうにして續々と左傾して行つた光景を、僕は一種の感慨を以て追想するのである。

さて僕たちが大學を卒業した頃から凡そ十幾年の間、世間は不景氣に傾く一方であつたから、僕たちやそれに續く世代の人々が就職のために、どれほど苦い經驗を嘗めたか、昨今の卒業生諸君にはとても想像もつくまい。いや、こんな事を書くのではなかつた。話を本題に戻さう。たゞ僕たちが學生生活を送つた時代が、どのやうな時代であつたかを少しく語りたかつたにすぎない。

近頃、名著『英國史』によつて我が國にも有名になつたアンドレ・モロワが、最近「一つの處世術」といふ本を書いた。彼はそのなかで、處世の術を、「考へる術」「愛する術」「働く術」「人を使ふ術」「老人になる術」の五つに分けて、例によつて極めて傾聽すべき、卓拔な見解を述べてゐるが、僕もそれに倣つて、學生生活を送る術を、「勉强する術」「遊ぶ術」「友を作る術」の三つに分けて考へてみたい。

まづ、「いかにして勉强すべきか」。學生の本分が何よりも先に學問の研鑽にあることはいま更云ふまでもあるまい。青年老い易く、學成り難しといふ言葉は、あらゆる時代を通じて學生の銘記すべき金言であらう。勿論ここに云ふ學問とは、試驗の成績點を稼ぐことでもなければ、況んや本學の豫科に於て見られる如き出席點を稼ぐことでも斷じてない。學問とは批判であると云はれる。しかし僕は諸君に向つて、そのやうな第一義的な要求を有つものではない。僕は何よりもまづ勉强することが諸君にとつて悅びであつて欲しいのである。學問といふものは何ものにも代へ難い樂しいものであるといふ事を心から感じて欲しいのである。

それにはまづ諸君が教室で教はることを、單に教室内だけの問題とせずに、諸君の日常生活に常に結びつけることが必要である。例へば、修身とか倫理は一般に極めて退屈な學科とされてゐる。なるほどそこでは、諸君の日常生活と殆んど何の關係もなさうに思はれる本質的な問題が、極めて抽象的に論じられるであらう。善とは何か。神の愛とはどういふものか。人間共同態の構造如何、等々。

しかし諸君が家庭の一員であり、クラスの一員である限り、兩親と意見の衝突を來すこともあれば、兄弟喧嘩をすることもあり、また友人と仲違ひをすることも屢々ある筈である。その時諸君は何等かの方法で以てその危機を脫しなければならぬ。諸君の實際智を働かせて、それらの問題を處理しなければならぬ。

もし諸君にして誠實に行動するならば、そのときの經驗は、諸君の心のなかに深く刻みつけられて殘つてゐる筈である。その生々しい體驗を活潑に働かせながら、教室に於て教師の語るところに耳を傾けられよ。世の中に倫理學ほど興味の深い、また教へられるところの多い學科は存在しないと思はれるに相違ない。要は教室の生活を、日常生活の延長として考へ、また日常の生活を教室の生活の延長として考へることである。眞の學問とはそのやうなものでなければならぬ。

從つて、諸君が何かの樂器に熟達しようと思へば、常にその樂器を手にして練習しなければならないやうに、一つの學科に熟達しようと思へば、常にその學科のことが念頭になければならぬ。勿論、それは教科書の内容を絕えず暗記してゐることでは決してない。知識が諸君の血肉となつて、あらゆる場合に生々と働くことが大切なのである。練習曲しか彈けない音樂家は永久に音樂の悅びを味ふことができないであらう。文法の規則と單語とを暗記してゐるだけでは、何時までたつても外國語は讀めないのである。教科書やノートを棒暗記して試驗に臨むが如きは下の下である。常に知識を生きた物として取扱はねばならぬ。それには何よりも學問に對する愛と尊敬が必要である。日常生活を大切に取扱はない人間に眞の生活の悅びがないやうに、教室の生活に誠實でない人間は永久に學問の悅びを知ることができないであらう。

「いかにして遊ぶべきか」。このやうな問には諸君の方が遙かに多くの答を用意してゐるに相違ない。事實、今日では、學生を享樂させる機關は殆んど至れり盡せりに備はつてゐる如くである。だが僕がここで述べようとすることは云ふまでもなく、そのやうな享樂法を列擧することではない。「いかなることがその人を笑はせるかによつて、その人の精神の高さを計ることができる」とは確かアランの言葉であつたと思ふが、我々は、いかなることがその人を樂ませるかによつて、その人の精神の高さを計ることができるであらう。ここに「いかなること」といふのは、娛樂の種類を指すのではない。洋樂を好む學生が、將棋の好きな學生より高級であるとは絕對に云へないであらう。しかし、すぐれた音樂を聽いて、精神の淨化を願ふ學生が、單に勝敗にのみ血眼になる學生より高級であることは云ふまでもない。

なぜなら、我々が氣晴しをして出來るだけ完全な放心狀態に入ることが必要なのは、精神の緊張を一時徹底的にゆるめることであると共に、その次の精神の緊張に備へることであつてみれば、我々の精神の休憩が、安らかな睡眠のやうに、できるだけ健康でなければならないからである。惡夢に充ちた睡眠が決して身體の疲勞を恢復させないやうに、惡しき慾望に伴はれた娛樂は、氣晴しには決してなりえない。一つのチームが同心一體となり、共通の目的のために、一切の自己の利害を忘れて徹底的に鬪ふ姿ほど美しいものはない。それは氣晴しであるよりも、精神の烈しい緊張であるやうに見えるけれども、このやうな忘我の狀態に入ることによつて、深い睡眠と同樣な、安らかな精神の休息を人は得ることができるのである。もし諸君が何かの娛樂で完全に我を忘れることができたとき、諸君は最もよく遊んだことを人に誇れるのである。その追憶ほど懷しく樂しいものはない。「よく學び、よく遊べ」とはまことに至言であると云はねばならぬ。

「いかにして友を作るべきか」。友情を鍛へることは學生時代の最も重要な課題であるとは僕の確信である。學生時代に眞の友人を作り得ないやうな人間は、社會に出ても決して成功することはできない。なぜなら、我々は眞情を吐露し、自己を犧牲にすることなくして眞の友人を得ることができないからである。美しい友情が人間のもつ最大の美德であることについてはいまさら云ふまでもあるまい。しからば我々はいかにして友人を作るべきであらうか、眞の友情は我々に何を要求するであらうか。アンドレ・モロワはその友情論のなかで、完全な無私無慾と相互の尊重を友情に必要な二條件として擧げてゐる。

曰く「誠實さを許すのはこの尊重のみであることを理解することは極めて重要である。我々は我々を愛し、もしくは讃美してくれる人の言葉には悉く敬服する。そのわけは、我々は自己に對する信頼、それを缺くときには人生があまりにも苦しいものになるであらうこの信頼を失ふことなしに彼の非難に同意することができるからである。……友情といふものは丸ごとでなければ與へられることの、もしくは取り下げられることのできない、完全な信頼を豫想してゐる。……そしてもしこの信頼が間違つて置かれた場合には？　止むを得ない。私は眞の友人を裏切るよりも、僞りの友に叛かれる方を一層愛する。」云々。

基督教主義に立つ大學の使命

高松孝治

立教大學も大學であるからには學術の研究に於て、何れの大學にも劣らないばかりでなく、更に進んで何れの大學よりも勝れたものにならうと努力する位な意氣込がなくてはならない。それは空想だと云ふ人もあらう。然し空想無くして大業は成らないのである。しかも立教は文學部・經濟學部の如き、設備を最少限度にしてもやつて行けるものを取扱つて居るのであるから、日本一を目ざしても不可能とは云へない。既にその昔は英語に於ては自他共に許して居た。また經濟學部に於てもその實を擧げつゝあると云はれてをる。更にヘブル文學、ギリシャ文學、ラテン文學等の如く、日本に於てはまだ極めて幼稚な方面に進み、或は米國文化の研究に進むならば寧ろ容易であるとさへ考へられるのである。

然しながら、假りに立教が學術の研究に於て日本一となつたとしてもそれで果して基督教主義に立つ大學としての使命を全うしたことになるであらうか。學術の研究だけならば、基督教主義といふ言葉のレイゾンデトルは無いのである。若し、立教が世界の諸大學に冠たる學術研究所になつてもキリストは「汝なほ一つを缺く」と評するのである。

基督教のシムボルは十字である。立教大學は學術の研究に更にプラスαが付いて居なければ立教たる使命を果して居ないのである。全世界は擧げて學術の進歩に努力してをる。しかもその結果は全世界の混亂である。十αを忘れたからである。その昔羅馬も春秋の亂世が無宗教的學問に歸因することを述べて「儒の道天を以て不明と爲し、鬼を以て不神となす。天鬼悅ばず。これを以て天下を喪ふに足る」と云つてをる。

然らばプラスαとは何であるか。人間がマイナスの狀態に陷つた時、即ち病氣、失敗、失業、失望等の中にある時無限大の力を感ずることである。聖パウロはこの力を感じて居たから「我ら四方より患難を受くれども窮せず、爲ん方つくれども希望を失はず責められるれども棄てられず、倒さるれども亡びず」と云ひ得たのである。キリストはこの力に滿ちて居たから國の爲に最善を盡しながら、親兄弟に誤解され、愛する弟子に裏切られ、世は彼を捕へて殺さんとする時「我既に世に勝てり」と叫び得たのである。

我國にとつて學術の優秀な青年は必要である。才能ある青年も必要である。そしてこれらは皆上に立つ人々である。然し國家も社會も、家屋と同じで如何に上層が立派に出來上つて居てもその基礎がわるければやがて倒れる運命にある。人の目につかず、全く土に埋れながら凡てを支へて行く石となるべき人こそ眞に興隆せんとする國家社會に最も大切な人々である。そして立教は斯る人々を作り出す最も重大な使命を與へられてをるのである。

立教の開祖ウキリアムス先生は、實に、水の如き人であつた。老子の云へる如く、水は萬物の生命でありながら、少しも高ぶらず己を空しくして、たゞ謙遜に下へ下へと、やがては人の最も厭しむ下水道に流れて行く。その如く、ウキリアムス先生は故郷を棄てゝキリスト教嚴禁時代の日本に來り、あらゆる困難と戰ひ、衣食を犧牲にし家庭生活をも犧牲にして我國の青年の宗教々育に努力し、立教の基を置かれたのであるが、キリストの精神に從つて右手になした善を左手にも知らしめず、やがて年老いられた時に、もはや日本の爲に何事も爲し得ぬ者は日本の食物を食ふに忍びずとて凡ての友情を犧牲にして友なき米國に歸へり、養老院で永眠されたのである。神はその凡ての榮光を犧牲となし、遂に十字架上で罪人に共に死ぬることをもあまんじて受け給ふと云ふ基督教の信仰がこのウキリアムス先生を作り出したのである。

立教大學に教ふる者も學ぶ者も、我が立教の有する、尊い傳統と使命との認識を新にすべき秋ではあるまいか。

周作人氏に會ふの記

前島潔

一

周作人氏の名は既に渡支前から、支那現代知名の文人として、また文名一世に高かつた魯迅の弟として、私も知つてはゐた。併し今夏の私の北京旅行のプログラムには周作人氏訪問は書いてなかつたのを、急に彼地で訪問する氣になつたのは、朝陽門外の崇眞學園を參觀したとき園長清水安三氏から古い立教在學者です御訪ねになつては と勸められた爲であつた。私は其の前日北京臨時政府の教育部總長湯爾和氏に面會して、日滿支協同體に於ける教育理論に就いて意見を糺し、自分も卒直に思ふ所を述べて來た後なので、今度は誰か在野の相當人物に會つて見たいと考へてゐた際故、周作人氏が立教在學者とは思ひ設けざる幸と早速宿に歸るや、電話で都合を聞いて翌々日訪ねる段取を付けた。

八

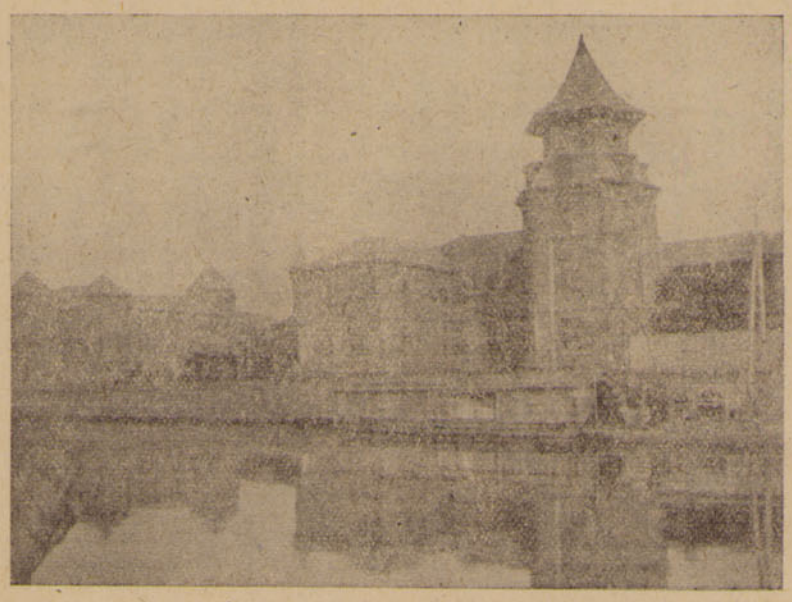
月十五日、立秋を過ぎた七日目流石に北京の酷暑も立秋を境に漸く過ぎ去らうとはしてゐたが、未だ日中はなか〳〵堪へがたかつたので、日の傾きかけた午後三時過ぎ、支那名物の洋車を傭つて王府大街の宿を出た。大陸の強い日光が紫禁城の黃金色のいらかを強く射て燦々と輝くさまを左に見、景山大街を西に進んで三座門を過ぎると兩側に靑く光つた北海、中海の水が美しく眼に泌みる。私を戴せて走る車夫の半纏の背に滲み出る汗模樣が、地圖のやうな復雜な曲線を描いてだんだん擴がつて行くのを見まいとしても眼に付く。安價な同情を寄せた所でどうなるものでもない、彼にとつては汗を流さぬ事より客の無い方が一層苦いのだ。賑かな西四牌樓を過ぎて靜かな通りに這入ると、車夫は二三回とまつては人に道を聞いた。其の度毎に言葉の通じない私は文字の讀めない車夫に代つて、周氏の所書を認めた紙片を相手の人に示す。相手は車夫に早口で何か語り聞かすと言ふ手數を繰り返して、やがて、雨の日の泥濘が思ひやられる胡同（小路）に車を引き込むと間もなく、無雜作に「周宅」と書いた木片標札の懸つてゐる門の前に出た。

二

洋車を其處に待たせて置いて門に音なふと、やゝ眼付の鋭い門番が二人現れた。私は支那の習慣にしたがつて門錢（チップ）を握らせようとしたが彼は受取らない。私の名刺だけを持つて奥に消え、暫くの後再び現れると相手の男に何か言うて私を內へ案內させた。門を這入つて正面突當りに大衝立の如く立つ牌塀（?）を廻ると、そこに再び築地塀に圍まれた一廊があつて中門が付いてゐる所、型通りの支那上流邸宅である。案內者は私を中庭に導き入れ、正面支那家屋の應接室に伴つて立ち去らうとしたので、再び門錢を差出すと此男も辭して受取らない。支那にしては珍らしい事である。或は日本馴れした周作人氏か又は其の夫人（日本婦人）が、來客殊に日本人からは門錢を頂かぬやうに門番を訓練されて居らるゝのかとも思ひながら、導かれた應接室の椅子に腰かけて、さて四邊を見廻した。

壁を背にした書棚が鍵の手につらなつて和漢洋の書籍をぎつしり抱いて立ち並んで居る。一見して日本物が六割以上を占めて居るかと思はれたが、文學美術、歷史、哲學隨筆物の諸般に亘つてゐるところ、周氏の日本文化に對する理解の廣さが察せられて、そゞろに敬意が湧いてきた。そして嘗て『周作人隨筆集』の中に荷風の「つゆのあとさき」や隨筆「冬の蠅」谷崎潤一郎の「攝陽隨筆」などを紹介した一節を讀んで感心したことを思ひ出した。「恁んな讀書人が今後大陸に殖ゑて行くとしたら、日支文化の交流のためどんなにか役立つであらう。日本の出版界も將來大に發展性があると謂ふ可しだ。

給仕が茶を持參して卓上に置き、一揖して去つた。春寶とでも謂ひたい靜けさである。窓の紙障子、入口の几帳風な垂れ、すべて强い光線を柔げるに役立つて、二十世紀の强い刺戟は何處にも見出されず、都會の騷音とは全くかけ離れた一幽境である。まさに「思ひ邪無く」うつとりとしてゐると、庭先に柔かな履音がして大きな影が障子にうつる。即ち主人周作人氏が麻の支那服を纏うて靜かに私の前に現れた。



（周氏の談話をつかした築地の立教學園）

三

私が周氏を訪問して間もない頃、細田民樹氏外二三人の文士が突然周作人氏を訪問した記事を、何かの文藝欄で讀んだ。其の時細田氏は暑いのでワイシャツに洋袴のまゝで出かけた由であるが、はしたなきわざだと私は思つた。支那の人達は洵に禮儀が正しい。盛夏の候なほ男女ともに襟元からきちつと締つた支那服を着け、履を穿いて居る。洋服ならば上衣のボタンまでかけるやうに心がける。其れに引き換へ浴衣がけに素足の日本風俗は支那の人達に輕侮の念を起させること甚しいとあつて、北京の皇軍宣撫班では在留日本人に自重を要望した由に聞いて居る。それで私は支那の人達を訪問した時はできるだけ言葉にも服裝にも注意することを忘れなかつた。然るに周作人氏は、自身は極めて整つた服裝と姿勢で物靜かな口調を以て話すに拘らず客には少しも窮屈な感じを與へぬ空氣を醸し出して居る。談話中私はつとめて「中國人」「中華民國」と謂うたに拘はず、却つて氏の方が民國人が厭ふ「支那人は」「支那では」を連發して受け答へする風であつた。

凡そ一時間半ばかり、私達はつとめて政治談を避けて、日本文學や、儒教精神や、東洋文化や、教育問題などに就いて語り合つたのであるが、大部分はもう忘れて了つたし、また殊更らこゝに記す必要もあるまい。今も猶ほはつきり殘る印象は、氏の靜かな、寂びた物腰、淡々とした物の言ひ方、どこか鋭い皮肉を典雅な樣子の裏に藏してゐる樣なところ、恰度氏の隨筆を讀んだ時と全く同じ感じであつた。深い叡智を額に藏した五十餘歲の文人、年齡にも知識にもまさに圓熟と寂びを加へた知堂周先生こそは、中國當代の代表的知識人と謂うてよからう。

四

話が偶々立教在學時代にかへつて一しきり築地の學園を共になつかしんだ。周氏が東京に遊學したのは六個年立教大學に學んだのは其の後半期で、二期或は三期卒業の人々と同クラスであつたらしく、其れも彼の黎元洪が武漢に革命の烽火を擧げた明治四十四年氏も亦南方靑年の一人として滅滿興漢の革命運動に參加すべく蒼皇歸國して遂に立教大學の卒業證書は貰はなかつたのである。併し氏の胸には矢張り築地の學園が東京遊學中の最も懷かしい所として殘つてゐるらしい。先生としては矢張りタッカー先生の名が眞先に擧げられた。氏は今にタッカー先生に希臘語を習つたことを德として居る。氏は今、希臘神話の全譯に沒頭して居られると聞いたが、恐らく立教で學んだ希臘語が相當役立つて居る事であらう。私は氏に立教の校友會員になつて頂きたい、歸京したら校友會幹事に貴下を推薦申上げるやう話す所存であると謂うたところ、以前今村さんが幹事をして居られた頃はよく印刷物なども參りましたが、其後住所が變つてからは來ませんと謂ふ話であつた。私は氏の口邊にたゞよふ微笑に潜む表情を讀みとりながら、壁にかけてある「苦雨齋」の篇額を仰ぎ見て、あの隨筆集に載つてゐた要領のいゝ「苦雨齋小書序」と題した短文を思ひ出した。

五

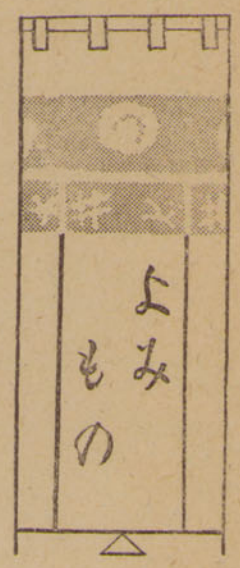
茲年正月一日、周作人氏は來客と對談中、學生風を裝うた數名のテロ團に襲はれ、ピストルに射たれて重傷を負うた。其時傍杖を食つた客、及び召使の一人が即死して、氏は幸に生命に異狀なきを得たが、此の事件は北京の人々にかなり强い衝動を與へた。其れ以來周氏は外出を控へさせられ文學部長の職にある北京大學へもずつと缺席で、偶々外出するときは私服警官が護衛について來るので、自然氏は邸內に引き籠つて、是れ幸と希臘神話の支那語譯に沒頭して居るのだと謂ふ。さては先刻門錢を受取らぬ門番と見たは其の實私服巡査であらうか。

私は周氏に一通り遭難に對する見舞の辭を述べて、矢張り蔣介石政府の廻し者かと聞くと、氏は言下に、否定して、私は浙江出身で重慶の要人達の中には友人が多い、重慶の人達は私を殺さうとする筈がない、あれは共產黨系の靑年ですと、强く主張した。そして何となく重慶の人達に或る親しい思を寄せつゝ、まゝならぬ世相を思うて一抹の憂愁を顏にたゞよはせたかに思へた。辭去する前私が畫帖を出して染筆を請うたところ、『畏天憫人』として署名されたのも、何かしら現在の悲しむべき狀勢に對して、氏の心境を示すかに感ぜられた。愈々いとまを告ると氏は

『そんな次第で私は外出を控へて居りますので、御答訪も致し兼ねますがどうか御許し下さい。』

と丁寧に挨拶されたのには却て私の方が恐縮した。そして矢張り支那の人達に接した時は、たとひ先方が氣のおけぬ態度を示してくれても、此方は日本人としての禮儀をつくす可きだと思うた事であつた。立ち上つて庭に出た時は、夕日の光がライラックの靑い葉を透して靜かな庭に流れてゐた。先刻の門衞が相變らず無表情な態度で、默つて門を開いて其處に居眠りしてゐたかに見えた車夫を呼んでくれた。（完）

—昭和十四年十二月七日—



學生新聞に就て

小山榮三

嘗てローは米國の學生新聞に關して「學生新聞は今や確立された教育上の一つの制度である」と述べたが、この言葉は日本の現在の教育界に於てもあてはまるであらう。殆んど凡ての日本の大學、專門學校がこの機關新聞を持つてゐるからである。

昔し我が立教大學も新聞を持つてゐた。然しそれは不幸な事情のため廢刊されてしまつた。これは我々にとつて寂しいことであつた。そして卒業生、學生の多くの人々によつて新聞の再刊が渇望されてゐたのである。

幸にして理解ある學校當局就中學長先生を始め其の他の教職員の方々の支援と同情と他方熱心な學生諸君の努力と意志とが結實具體化して、こゝに新しく立教大學新聞發行の氣運が醸成されてきたことは喜びに堪へないところである。

嘗て朝日の杉村楚人冠先生が「學生新聞は飽くまで學生新聞らしく獨自の路を行くべきで、學生新聞が町の一般新聞を模倣し、學生がひとかどの記者氣取りでゐるのは不愉快なものだ」と云はれたことがあつた。日本の學生新聞の歴史を省みると學生新聞をもつて學校當局と闘爭する手段と解したり、左翼運動のための學生煽動の機關として利用された時代もあつた。然し學生新聞はその本質から見て學校及び學生の教育施設でなければならない。我々はこの際前車の戒を特に反省して、學生新聞の本質と使命と任務を充分理解してをかなくてはならない。

學生新聞の歴史は一七六九年に北米のダートマス大學で學生によつて發行された『ガザット』が世界に於ける最初であり、本邦の最初の學生新聞は大正六年五月に發行された三田新聞である。

學生新聞の直接の讀者目標は云ふまでもなく學生であるが然しその他に職員、學生の父兄、先輩、下級學校生徒商人等の學校に關係を持つものにも及ぶものである。それで學生新聞は先づ學校當局の掲示板の役を勤めるものであつて「學校の告示、行政事項を通達し、同時に學生の生活狀態を報道批判する」ものである。從つて學生新聞の職能は學校と云ふ特殊社會の全面的生活を忠實に反映し、學校當局及び學部の告示規約を通達し學生の意見發表の機關となり、學生の輿論統一を行ひ、愛校心を振興し、學校、學生、先輩、家庭との連絡機關となり、併せて學校教育の完成に協力することである。

グリーンウオールトは學生新聞の規準を次の如く述べてゐる。

(1)學生新聞の立場は其の學校と關係を持つ限り第一に當該學校當局の公認又は管理下になければならない。(2)學生のために、學生の手によつて、學生のものとして發行されるものであつてその目的は學生の最大多數者に最大幸福を與へやうとすることであり、且つ學校の秩序を維持し、品位を向上し、校風を發揚しやうとすることである。(3)學生が社會的に尊敬されてゐる現在に於ては學生新聞も亦社會から積極的な支持を受け期待がかけられてゐる。從つて學生新聞は單なる學生の新聞作習の目的で作られるものではなく、全學生の生活を直接に反映し修養に資する創造的構成的教育手段として役立つものである。(4)學生新聞は學校當局と親密な信頼關係を結ばなければならない。賢明な同情的な當局の監督と編輯員たる學生の自尊心と自制心とは檢閲を自治的に自發的に行はしめる。(5)學生新聞は當局の單なる機關紙又は一學聯一團體の占有物ではなく全學の協力的な教育施設である。

かくして學生新聞は學生の手によつて學校で發行されるものであつて其の經營主體は同好の有志、學友會、新聞學會、學生課等である。既に本大學には新聞學の講座が設けられてゐた。

精神技術的意味に於て社會の上層部に立つて指導的位置につく人物を養成するところの專門教育にとつては、新聞學の理論を一應理解しておくことはその將來の發展の基礎をなすものである。かゝる研究は實務に對して社會の凡ての部門に關する包括的な概觀を與へる。勿論經濟學的、商業的なものをも含めて、又それは新聞の任務を社會生活全體の中へ組入れ、新聞事業の樣式と作用を教へ、從來職業的な日常の勞働の中で絶え間なく活動する場合正しき社會認識の基礎に立つて彼の生活の目的に對し、不斷の自覺と反省を與へ精神的指導性の爲めに必要な、自由な活動の局面と限界とそして指針とを知らせるであらう。

今や立教學院の多數の先輩は遠く支那大陸に渡つて聖戰の目的遂行に邁進してをられる。そして恐らくは戰場で母校生活の追憶にふけつてをられるであらう。我々はそれらの人々を『新聞』によつて慰問することが出來ればこんな嬉しいことはないと思つてゐる。

映畫教育と兒童映畫

いよ〳〵映畫法の猶豫期間が切れて今月から映畫法取締規則が施行される事になつた。例へば兒童が非一般用映畫を見る事を禁じられ、兒童向映畫を見る事となつた。少くとも兒童は彼らの自己の知識を以て映畫を鑑賞すべき場合に遭遇するようになつて來た。兒童は「兒童のための」と云ふ特殊な製作意圖の下につくられた映畫を鑑賞すべき限定を有つに至つた。

斯る事態が兒童にどんな影響を與へるかは論外として、兒童に對する映畫教育が小學校に於て、本格的に行はれる必要が望まれる事は當然である。單に、映畫館から、ある部分につき兒童が閉め出しを食つたのに對處する意味だけではなく、小學校の教育の方便として、映畫の持つ具象性が盛大に用ひられるやうになつた。だが、そこで用ひられて居る映畫は「方便としての映畫」であつて兒童にとつて教育のための直接の映畫ではなかつたやうである。例へば既成の興行用映畫が屢々、小學校の講堂で上映されたし、教師にとつて不滿に堪へない科學映畫が教材の一部に用ひられた。小學生のために特に作られた兒童映畫と云ふものも量的に優れたものは見られなかつた。だが、兒童に對して映畫教育を施す事はつとめて良心的な若い教師によつて研究されて居り、グループも結成され、發展しつゝあつた。だから一部の映畫人が云つて居る如き、映畫法の規定によつて興行的な必要（兒童の觀客を吸收するための兒童映畫館の設立とか兒童映畫を特に製作するとか）から兒童映畫が要望されて居るのではなくして、映畫法成文以前から兒童に對する映畫教育の必要は存在して居たのである。

映畫による兒童教育とは映畫を鑑賞する事によつて兒童の教養を高めようと云ふのであつて、映畫を學習に利用して知的な啓發を行ふと云ふ場合とは異つて來る。すでに云はれて居る世俗的な意味の「兒童映畫」とは前者の場合へ當こんで作られた兒童的映畫であつて、こゝに僕の云ふ兒童の「ため」の映畫の意味とはかけ離れて居る。

他の藝術方法論を以て、殊に文學的なそれを以て映畫藝術を律する事の不確さはつつしまねばならない。更に映畫教育に於いても既定の昔の教育方法を以て實行する事の愚が如何なるものかも論をまたない。だから未だに文化映畫の明確な定義は下されて居ない。そう云つた混亂の中から生じた分類の中に兒童映畫なる範疇がある事それだけで不正確な感は免れない。

（兒童映畫は生きた子供の眼で見た主觀的記錄である。本當の兒童映畫は子供が作らねばならない。兒童映畫には子供が出演すべきである）と云ふ考へ方は非現實的な抽象的な理論で、現在行はれて居る映畫企業や映畫教育から考へたなら再考を要するものであり教育は要望される以上に現實の事體を實行性を基底として居るからである。

かたちや兒童映畫はあるのかないのかと云ふ質問が出さうである。たとへて云へば文學の中に於ける純文學と大衆文學ほどのはつきりとした存在が映畫文化にはないのである。元來が映畫はそんな區別を必要として居ない。そこに個人藝術と集團藝術（映畫）の相異があるのであるが、だから寧ろ映畫の樣式をあゝ云つた風に分類する事がおかしな次第である。そこから特に固定した觀客を對象とした、特定の兒童たちに分せるために作られた兒童映畫と云ふものは、普遍性の少い、從つて映畫藝術的價値の餘り多くないものとなつて來ると云ふ事が云へるであらう。

所で學校教育に主として知育的に映畫を利用して來たものに理科系統の大學と、小學校に限られて居る。更に德育的に情操教育の目的で映畫教育が行はれ新らしい人格を作りつゝあるのは東京市の極く少數の小學校で施行して居る。具體的な方法として、映畫教育とは凡ゆる映畫の正しい見方を小學兒童に獲得せしめ彼らの正しい社會觀を統一させるために（簡單に云へば「君たちの社會に於ける當面の問題を自分の今までの映畫的な經驗で如何に處理すべきかを君たちで考へる」と云ふ事を分り易く説明すべく）行はれて居るのである。兒童は先生から若干の示唆を受けて映畫內容の正しい把握の仕方を考へるのである。斯の映畫教育のやり方は未だ强力な理論となつて居ない。それは教育指導者の非常な英斷を必要とするもので保守的な小學校に於いては、知的學習の補助手段として、「動く掛圖」として映畫を利用して居るものが多い現狀である。

東京市の麴町、赤羽、仙島、龜戸などの小學校が積極性を持つて兒童の指導に當つて居る。そして「私たちは兒童の父兄をもも映畫教育致したい」と抱負をもらして居た。兒童は講堂のトーキー鑑賞の前提として低學年になる程、サイレントの16粍映畫を自分の教室で自由に映寫する。（幼稚園兒も定期的に見て居るとの事である）

兒童がサイレント映畫から吸收する音響とか色彩に對する映畫的感覺は仲々鋭く、更に映畫の內容から彼らの性格へ附加へられるものはその影響を慮外にする事の出來ぬものがある。だから兒童の心理は發達過程にあるものである、子供はなどゝ輕く片付けてしまふ事は危險な事であつて、兒童は常に大人と同じ生活にひたりたがつて居、大人に負けない鑑賞眼を有して居るのである。たゞ兒童は自分の心裏を發表するのに自分の乏しい素朴な語彙の中から大人の觀念の中から失はれかけた幼い言葉を以て表現する。斯かる場合、一般の大人は兒童に對して單的に「子供つてオカシナ見方をするなア」と思ふであらう。斯る特殊な見方をするなと大人が思ふ兒童の爲に彼等の分る映畫（兒童映畫）を作る事を考へる。それは兒童にとつて一種の有難迷惑な事であるかも知れない。一番困るのは、兒童映畫の中に現はれるモラル（多分兒童はこのモラルに從へと教へられるであらう）と實社會の大人の持つて居るモラルとの間のギヤツプを如何に妥當化して處理するかである。だから今までの兒童映畫の中で描かれて來た社會事象に對するモラルで育てられた兒童が、現實社會に當面して得た社會惡は彼らの持つモラルで處理に苦しむものが多く、そのため非常な衝激を受けるに違ひない。だから特別に映畫の對象に兒童を限定して製作された兒童映畫が、兒童の道德觀を限定し、映畫の藝術性を限定する事になつて來る。

それよりも、一般の映畫から兒童に必要なものを吸收させ、統一ある觀念を植込む事が必要ではならうか。映畫に限らずいろんな社會事象（主として社會經濟的な制約）によつて生じたモラルの混亂の中にあつては、兒童にとつてどんな場合でも共感を有するのは「愛情」であらう。物に對して生物に對して人間に對して「愛」は兒童にとつて潤ひである。君たちの周りのものから愛情を見出せ」と兒童は教育されて居る。それと映畫教育によつて得た情操と批判力が兒童の力となり一定以上の國民的な常識となつた場合、一定の方向に進まうとする集團に於ては、新らしい力强さとなるのは必然であらう。だから僕たちは小學兒童に與へられて居るあらゆる映畫の正しい見方の權威的な指導に從つて居る若い教師の前途を注目してやまない。

（映研　池部三郎）

スポーツ

□跳巾走ノ手選原□

活躍を期待される スケート部

十一月十七日夜の關東學生氷上ホッケーリーグ戰も早慶戰を最後として終りを告げたが結果は立、明、早が各三勝一敗の同成績で優勝は保留となつた。

シーズン前の豫想は昨年度とメムバーの變更のない早大が優勝候補の筆頭に置かれ續いて立大、明大、慶大の順であつた、試合は慶大が僅少の差で各校に敗れ、明大の進境豫想以上に目覺ましく立大を一敗せしめた、立大は對早大戰頃より漸く好調になり、そのパスワークは絶妙をきわめ優秀な技術は體力の早大を物の見事に壓倒し去つた。

我が立大が壓々用ふる五人防禦より出發する逆襲の戰法はやゝもすると消極的に陷り易いものであり之は同時に立教のチエンヂメムバーの弱味を示してゐるものである、スピードの點より見れば昨年より遜色を認められないが之が對明大戰の如きトップコンディシヨンの相手にぶつかつた時には消極的戰法の弱點を暴露するに至るのである、D・F内藤に配する大村は未だしの感がないでもない、對早大戰のGK三宅の完璧な防禦振りは絶讃に値するものである。

今期明大の進出が各校に與へた影響は非常に大なるものがあつた、この結果として次回のインターカレッヂ、全日本選手權大會が宿題として大きく殘される事となつた、然し實力相伯仲した四校（立、早、慶、明）のうち傳統ある技術的チームとしての立大に多大の期待が懸けられてゐるのは當然と云はれよう。

レスリング部 リーグに加盟

新設以來僅か一年野田主將統率下に少數部員而も不完備の道場を以てすく〳〵と其萌芽を成長させたレスリング部各員の努力は賞さるべきであらう。

二月十一日米比遠征軍歸朝歡迎會に野田判定に敗れたりとは云へ米國轉戰十二戰全勝の太田に善戰、關東學生リーグ戰に早明、各々二軍に一勝リーグ加盟の機運を促進す。

十一月五日リーグ加盟第一戰に常勝明大を相手に廻し八對一で敗れたりとは云へ堂々の熱戰記を殘したりとは云へ記憶される白敗れたりとは云へ記憶される白熱戰であつた。

十一月十二日立早戰に七對二十一月十九日立專戰に七對二十一月廿六日立慶戰に六對三にて奮戰の甲斐なく敗れはしたが野田、黒見、松尾、松岡、角田、小柳津各選手は秋シーズンを通じ母校の爲に奮戰貴重なる得點を獲得す。

十一月二十三日第四回全日本選手權大會に豫科一年生ら角田良く戰ひバンタム級選手權者の榮冠を戴く。

斯くして新生以來僅々レスリング界へ潑剌として登場各選手の旺んな鬪志は明日を期せしむるに充分であつた事は特記される事である。

向上の一路を辿る 弓道部

四月早慶明との定期戰續いて立商慶豫科の定期戰後識訪に夏季合宿を爲し八月よりリーグ戰開始春季に同じく立早慶明商慶立豫科の定期戰、關西諸大學定期戰の爲遠征等連戰奮鬪し、昨年度の行事も終へ、本年一月中旬より二月下旬迄一ケ月寒稽古を行ひ二月十一日建國祭には百射會を行ふ豫定である。

戸津主將統率の後を受け繼いでの新役員は左の如くである。

新役員　主將　津島　克
副將　原　正昭
委員　淺野　憲一
會計　石井　將夫

六大學戰に春秋二連覇 拳闘部偉業を達成

拳闘部の活躍は目覺ましく、其の主なる戰績のみにても、關西の雄關學大を五對四にて撃破六月三日甲子園に於ける日比對抗戰に康仁錫君フェザー級代表として比島代表ロザリオを撃退し、六月一日日比谷音樂堂の春季六大學優秀選拔對校戰に名子小浦、金杉、木村、康の五選手善戰して遂に堂々第一位を獲得す、逗子に夏期合宿を行ひ、春秋二季連覇を目指して猛練習を續けた。

十一月一日日比谷音樂堂に於ける秋季東京六大學優秀選拔對校戰に小浦、奥、松川、木村、康五選手出場、奥、良好のコンディシヨンと旺盛なるファイトを以て奮闘し判定にK・Oに寧日なき練習の成果を充分に發揮して全勝を博す、こゝに春秋二連覇の偉業が達成せられた、二位は日大、專大、四位法政、五位農大、中央であつた。

日本の拳闘ファンを湧かした日米拳闘試合に豫選に於ては小浦、名子、松川、康、文各選手活躍し、小浦、松川、康の三選手は日本代表として後樂園に、大阪に、日比谷音樂堂の大會に出場して立教拳闘部として又日本代表として拳闘に於ける實力ファイティングスピリットを如實に示したのは偉とするに足るであらう。

秋季最後の大會である關東學生選手權に於て、小浦、奥、濱田、文、康の五君準決勝まで殘り、文、康二君不幸決勝戰にて對戰することとなり文君棄權してライト級の選手權は康君獲得する處となつた。

學友會優勝部表彰會に團體として又個人（康君）として二枚の表彰狀を受けると共に六大學よりは鳩山總裁よりの優勝楯を贈られる等の數々の榮譽ある功績に輝いてシーズンを飾つた。

今シーズン新人として活躍注目せられたのは金、戸田、高見の三君であつた。

拳闘部十五年度新役員決定

監督　木村精二
主將　松川一郎
マネーヂャー　小浦正壽
委員　劉守鉉　小林弘

シーズン終る!!

全勝の記錄に 柔道部覇を唱ふ

青山學院對立教豫科十五名中六名を殘して大勝

明治學院對豫科十五名中三名を殘して勝ち遂に今春立大柔道部の提唱により成立した此の聯盟第一回大會に於て輝く優勝旗を獲得す。

農大對立大定期試合（第二回）六月十日於農大

佐々木、吉川、西野、田宮、淺井、片桐、松田、竹内、村上、箱守、菊地、永井、今泉、中川、津村、石井、黒見、小柳津、副將山中大將野上の二十選手の陣容を以て堂々二十名中七名を殘して大勝す。

日大豫科理科對立教豫科（一、二年）十一月十六日於立教大學

十三名中五名を殘して大勝

法大對立大定期試合（第二回）十一月二十五日於立教大學

昨年度掉尾の試合熱戰又熱戰大將戰となり野上五段縱四方固に敵將今西三段の首級を擧げ優終の美を飾る。

斯くして堂々の戰記を以て終止し遂に十二月二十五日榮ある優勝部として優勝されるも野上主將山中委員全部員の努力の賜であり、當然の結果と云へ樣尚一層皇紀二千六百年の意義ある年に於ける國技柔道特に立教柔道部の活躍こそは、刮目さる可きものがあらう。

慧星的進出!! 自轉車部

五月法政六月早稻田を一蹴し全日本選手權に河内、長岡兩君優勝の輝く戰績を收めた自轉車部は夏季合宿練習を片瀬に行ひ十月のインターカレッヂに備へ着々決勝戰に進出し、惜しくも榮冠を逸したが、五十キロ道路選手權に長岡、河内、齋藤三君二三位に入選、神宮大會に河内、長岡、齋藤、崔、重政、佐々木君等學生代表に選ばれる等の躍進の一路をもつて秋のシーズンを飾つた。春秋二季の輝く記錄を殘し氷瀨主將は次の飛躍を新役員に讓つた。

新役員　主將　須田　朝一
副將　林　麗四郎
マネージャー　鷹見　禮一

卓球部 長蛇を逸す

十月卅日より十一月三日の明治神宮體育大會兼全日本選手權大會に昭和十四年度ランキング保持者として獲に輕、船木組、單に輕出場、複は輕、船木組優勝候補の貫録を示し裕々と決勝戰へ進んだが、ダークホース東京代表山口角取組のため不覺にも敗れ、當然の優勝を逸して了つた。

獲の雪辱を遂げんものと單に於て輕君苦戰を續けながらも大いに頑張り、遂に決勝にて宿敵早大今君との對戰となつた。

輕1（14－21　11－21）2今

セットオールの後兩者追ひつ追はれつの接戰を演じたが輕少しあせり打過ぎてミスを出し惜しくも全日本の覇權を逸した。

全關東學生卓球リーグ戰は昨秋十月中旬より下旬にかけ、その參加校三十二校その一部として出場した、早大、帝大の好調の爲め善戰せるも遂に敗れ第三位に終つた。

十一月廿三日名古屋に遠征し第七回中部日本卓球優勝大會に出場、日大、名古屋高商、濱松高工を夫々三對〇にて一蹴し輝く三連覇を樹立した。

陸上競技部活躍

明治神宮競技場にて六月三日行せられた關東インターカレッヂに原君三位にて走巾跳に入賞、四百米繼走には五位に入賞の白人籠球チームを破ると共に一部校の第八位となり六月十日の對同志社大學との定期戰に於て之を一蹴し、新潟縣柏崎海岸に夏期合宿をなして秋季シーズンに臨むだ。

十月廿一、二日甲子園南運動場に擧行せられた全日本インターカレッヂにて主將原君は走巾跳に七米一の記錄をもつて優勝し校歌吹奏裡に塔上高く校旗を翻らせた。

十月十四日立大豫科、明治學院、青山學院のスリーミッション對抗定期戰が行はれた、砲丸投、走高跳、百、四百、五千米及び八百米リレーに各一位を得て青學、明學を卅數點引き離して豫科堂々と制勝す。

（カットは走巾跳優勝の原君）

庭球部健闘す

十月一日對同志社大學との第十二回定期戰は本學コートに於て行はれたが、文部省の遠征許可により突然當日擧行と決定せるため選手は東日トーナメントの疲勞甚しき最惡のコンディシヨンの下に試合せねばならぬ苦境にあつた。併し部員一同の必勝の決意確く、遂に見事全勝の記錄を殘して快勝し七年連覇を唱へるに至つた。

明治大學八幡山コートに於て十月廿八、九兩日にわたつて十四年度より開催せられることとなつた對明大第一回庭球定期戰が行はれた、昭和十三年度のリーグ戰一部昇格試合に不覺にも惜敗し、その復仇の意氣に燃えて好試合が展開された、本學の優越せるファイトに勝敗は決定せられ、六－三の成績で明大に制勝した。この試合に於ける、田中主將、原田、河野の奮闘好技は賞すべきものであつた。

明治神宮大會には本學より田中、木谷、原田、脇田の四名出場活躍した。

秋のシーズンの掉尾を飾る十一月十八日よりのローンテニス社主催のトーナメントは早大、慶大、帝大各コートに於て二百餘人の新進プレーヤーの參加のもとに擧行せられた。本學の原田、吉田、河野の四名はシングルスに於ても、ダブルスに於ても優勝候補として謳目されてゐたが、惜しくも敗れて優勝を逸した。シングルスに於て原田は五回戰に早大磯部に敗れダブルスに於ては原田、脇田組及び吉田、河野組が共に準々決勝戰まで進むだが、結局吉田、河野組のみ殘り、準決勝戰に於て瀧鼻歌川（商大）組と對戰した

吉田　1（6－4　6－3）2　瀧鼻
河野　3－6　歌川

右のスコアーで善戰せるも惜敗するに至つた。

好調のホッケー部

春合宿地關西に於ける强豪チームと戰ひ優秀なる成績を以て歸京、春の行事たる高專大會に於て慶應豫科に決勝戰にて惜敗部員一同猛烈なる夏期合宿練習を行ひ必勝を期して秋のシーズンを迎へた。

九月中旬よりの學生リーグ戰に於いては左のメムバーにて帝大、明治を破り慶應、早稻田、商大に善戰して ビッグスリーの地位を獲得した。

F.W　武藤　田口　橋　崎守本水
　　亀内中西　田部田蘆西尾
（杉江　伊藤）
H.B　久保　高
　　濤　宮小宮（清
F.B
G.K

十一月中旬よりの全日本には長南、千葉兩先輩を主柱として奮戰せしも、第二回戰に於て宿敵早稻田に惜しくも敗る。

昭和十五年度新役員

主將　溝口　弘
委員　橋本　進

榮冠輝く籠球部

七月八日午後七時四十分より神宮コートに行はれた日加國際籠球戰の白眉たる立大對カナダ籠球戰は31－27で强豪カナダ軍を破り凱歌は立大にあがつた、世界第二の强豪と自負するカナダ軍を堂々撃破して日本で最初の白人籠球チームを破ると共に强豪カナダチームを降した唯一の學生軍たることを思へばこの一戰における立大籠球部の奮闘は絶讃に値するものである。

その他の多くの試合に於て大勝し春のシーズンを飾つた籠球部は、關東大學豫科リーグに於いて本學豫科は全勝をもつて優勝し、三連覇の偉業をなし遂げた。

第十六回關東大學籠球リーグ戰は約二ケ月に渉つて多彩な秋のシーズンを開始した。

對商大戰並に對明大戰はシーズン初めのためにパスワークが惡く不調ではあつたが順當に勝利を收めた、然し對文理大戰に於て今シーズン始めより不調の爲め遂にストレートにて敗退せしめられた。昨年のメムバーに全く變更がなく絶對的な强味を確信して居ただけにこの敗退は實に意外であつた。然しこの日の立大の試合振りには チームプレーが全然見られず、其の上當の如きファイトもなく、得意の速攻も長攻も全部文理大に逆に用ひられてしまつてゐた。對帝大、早大戰はこの試合が覇權へ影響するところ重大であつたが爲に、立教軍は積極的な强攻策をもつて全員猛烈な速攻と突つ込みを敢行して、兩軍を壓倒的に制し、連勝した。

今季リーグ戰の優勝は文理大の躍進により最後まで判らなかつたが、立大が帝大、早大をストレートで破つたことと文理大が帝大と三回戰を行つたことにより結局覇權は立大の手に歸した。

榮冠に輝く立教籠球部は比島の招聘によりこの冬休みを利用して遠征し比島の優秀チームとの對抗戰に活躍中である。

秋季リーグに第二位 排球部

春季排球リーグ戰に第三位獲得、立、明、日三大學定期戰に優勝の記錄を春に殘し、八月廿五日より日光今市にて夏期合宿を行ひ全員絶好のコンディシヨンを以て秋のリーグ戰に備へた。

秋季リーグ戰は九月十六日より濱松町コートにて擧行合宿以來全員の士氣旺盛惜しくも早大に敗れて第二位

明治神宮國民體育大會に東京府代表として出場せしも第一戰に福岡高校と當り不覺にも敗る。

幹事　鈴木　正武
藤田　關雄

編輯室より

年末御多忙中記事御送附下され厚く御禮申上ます、紙面の都合上大部縮少して編輯するの餘儀ないことになりましたが、御諒承願ひます締切までに未到着の記事は割愛しました、次回よりは通信員を常備して下さる樣お願ひします

寫眞部員も出來る限り充實させ、スポーツ立教の目覺しき戰績の數々を記錄して行きたいと思つて居ます。

正確に早く、豐富な記事を編輯して諸兄の後援に應たい覺悟です。榮あるスポーツ立教に輝く戰績を希みつつ—

戰亂の祖國より

スパックマン教授歸朝

四月二十四日横濱を出帆以來米國を經由して途中聖アンデレ同胞會の發祥地である市俄古聖ジェームス教會其他を訪問重要任務を果しつゝ六月五日サザンプトン着直ちに倫敦の母堂邸に旅裝をとかれ約四ケ月祖國に滞在中偶然にも世界史の數頁を飾る第二次歐洲大戰の歴史的大事件に遭遇され其歸國を更に意義付けられ、風雲唯ならぬ大西洋を横斷米國經由無事十二月十二日歸朝されたスパックマン教授を赤坂三一教會の新宅に訪れた。

スパックマン教授は記者を未だ落着かぬ應接室にニコやかに招じ入れて問はるゝまゝに戰時の故國を偲び乍ら感激深氣に語り出した。「私は歸途米國に立寄り前總長タッカー氏等とお逢ひして立大のデポヂットライブラリーの事に就き色々と御相談したり桑港に居られる前教授フット氏の病床を御見舞しました。

故國英國に滞在中は偶然にも對獨宣戰布告と云ふ歴史的事件に遭遇し大變驚きました。私は宗教家なので軍事的な事は何も判りませんが倫敦市民は全く冷靜に處置して、先づ第一に兒童を田舍に避難させた程で、中には二萬五千人の人口の町に三萬人の兒童が離難した等と言ふこともあり、其爲に富豪の兒童が貧乏な家へ引取られたりして困つたり、貧乏な兒童が富豪に引取られて面喰つたり、面白い光景が見られました。

スパックマン教授夫妻（赤坂三一教會内新宅にて）

倫敦では三回程空襲警報のサイレンを聞いた丈けですが防空氣球を揚げたり、所々に砂囊を積み重ねたりして市民の冷靜さと相俟つて完全な防空が出來て居ました。

倫敦は食糧には全く不自由して居なく切符制度などと云ふことはガソリンの配給にだけ施行されて居るのみでした。

ともかく英米を通つて來て米國民は人種關係とは別に戀愛的に我々英國を支持して居ると云ふことは事實だと感じました。」

籠球部の海外遠征

（東京驛出發）の一行

立教籠球部は第一位チームとしてかねてより比島よりの招聘を受けてゐたが此度目出度許可が下り伊藤一郎監督（先輩）フアラー・コーチャー、岸主將以下十四名の選手一行は十二月十四日午後八時三十分神戸行列車にて東京驛より應援團其他に送られて西下十五日郵船龍田丸に便乘一路比島へ向つた。

"此之處賣切申候"

就職戰線大好況

小學校以來十何年かの學生々活の最後の夏休みが終ると、塔の下や芝生で聽かれる三年生の會話は就職のことで持ち切りである。今年は未曾有の軍需インフレで人的資源の缺乏が叫ばれ新卒業生はあつちでもこつちでも引つ張り風の盛況、飛ぶ樣な賣行（？）の故か彼等の會話も一頃の樣な沈痛さはなく一抹の哀愁を堪へながらも何處か陽氣で鼻息が荒い。

事實、本年度卒業生の就職狀況は去る十月初旬に早くも七十%の決定と言ふ活況で軍需工業會社が斷然トップを切り銀行會社が第二位を占めてゐる。內地外地と分類して見れば前者の諸會社銀行が一七〇名後者が一八名で一般に喧傳されてゐる程の進出は見られない。一般的には好條件で待遇する安定性のある大資本への集中傾向が見られる樣だ。

現在決定した主なる會社名は凡そ次の如くである、軍需重工業方面では三菱重工業日立製作所三井鑛山古川電工住友化學工業芝浦マッダ工業等、銀行保險會社では第一銀行三菱銀行興業銀行明治生命等、其他の大會社では鐘紡住友本社古川合名大阪商船日本郵船等　外地方面では滿鐵昭和製鋼滿洲電業滿洲電信電話朝鮮殖産銀行等、變はつた景が見られました。

スケート部

再び覇權を獲得

スケート部は全日本學生氷上選手權大會ホッケー戰に出場、傳統の力を發揮して京大、慶大を一蹴し優勝戰、立明戰に於て接戰の上三對二にて優勝し萬丈の氣をはいた、關東學生對校戰では三大學同率で優勝出來なかつたが今回の全日本學生戰は二年連續優勝したのである。

關東學生對校戰には明治に苦盃をなめさせられただけに全員一團となつて强敵に向つたので幸運も手つだつて覇權を得たわけです。ともかく松原湖に於ける練習のたまものとも云へますが部員の一致團結した精神力が大きな影響を及ぼして居ることは事實です と主將砂田君は語つて居た。

優勝のかずかず祝勝會

華々しい戰績に輝く昨年度學友會優勝部優勝者の表彰祝賀會は去る十二月五日遠山學長以下諸教授各部長等の參會の下に盛大に催された。各部には學長賞及び表彰狀を、優勝者には表彰狀が夫々授與された、當日表彰された部名及個人名は次の通りである。

優勝部　卓球（中部日本大學高等大會）柔道（三ミッション對抗）籠球（關東大學秋期リーグ戰關東大學豫科春期リーグ戰）拳闘（春期秋期六大學優秀選拔大會）

優勝者　康仁錫（拳闘）賴天頤、船木藤三（卓球）原誠（陸上）新井茂雄、大浦誠一郎（水泳）田口清（航空研究）

創立十周年

經濟學會

創立以來十年になる經濟學會は十二月八日學內十番教室で東洋經濟新報の村山公三氏の記念講演「緊迫せる歐洲情勢」を、引續いて東朝論說委員笠信太郎氏の「當面の經濟問題」と題する記念講演を行ひ多大の成功を收めた。

更に學會は過日學生調査報告を發刊その努力を謳はれたが今回十週年記念發刊物として未だその內容は明かにされてゐないが近日中に經濟學會誌拾週年記念號と學會拾年史とを編輯發行して多彩な十年の足跡を公にする。

感激の訪學機

十一月廿九日午前十時四十分頃本學上空に黄色な機體の九五一式練習機が現はれ本學上空に差しかゝるや突如豫科煙突目がけて急降下を始め校庭に居る學生を驚かせた、本學々生出口清君の操縱する航研一週年記念訪學機なのだ。

折から豫科校庭には體操の爲全學生が集合して居たので此の壓援と呼應して垂直旋回下降上昇と一年足らずの腕とは思へぬ美技を見せ並居る人を感嘆させた。機上の後部座席で兩手を揚げ"操縱援助なし"を示してゐるのは東朝池田教官だ、豫科屋上の發煙筒を合圖に花束、通信筒が投下され「空の日本、空の立教」の感銘を殘して約十五分の後、南方へと飛び去つた、通信筒には「創立一週年訪學機上の人となり得た事は感慨無量です、今後共諸兄の御後援を切望す」との意味の通信文が入れられてあつた。

因みに出口君は經二の學生で今年度全日本學生制限地着陸選手權保持者として我が航研始祖とも言ふべき松本（經二）君と並び稱される學生鳥人である。

興亞研究會發會されん

昨夏催されたる勤勞報國隊、上海に於ける勤勞等に依る大陸に對する深い認識を得て歸國した廿七名の學生を中心にして、學部當局の後援の下に、興亞精神を研究し本學に普及させる目的で興亞精神研究會が完成に近づきつゝある。

未だ詳細の確定は見ない點もあるが、手初として前記廿七名よりなる會がその中核をなし、以後毎年の報國隊員を指導參加せしめ對外普及には海研國研と協力本學々生に呼びかける事に決定を見た。

大いに一般學生有志の協力も得たいと當局は語つてゐる。

御聖慮に答え奉る

豫科振勵會の發會

過日賜つた青少年學徒に對する御聖慮に答へ奉る爲本學全豫科生徒の全くの自發意志の下に振勵會は十月十三日その發會を見た、豫科當局はその主旨を喜び絶大の支持を與へてゐる。

その主旨は禮節親和に依る學風の發揚、學徒使命自覺、切瑳琢磨の三綱領よりなり之に依り聖恩に答へ奉る爲のものであり斯樣な大規模な此の種の試みは最初の事である丈けに諸方面より大なる期待がかけられてゐる。

留守部隊訪問

"音樂と兵隊"　竹村教授

（戰線の竹村教授）

最近にお便りがありましたかと二人の可愛いゝ御子息と留守宅を守る千萬子夫人に問へば、「いゝえ如何したのですか、近頃少しも來ませんので……」と大事そうに箱を抱えて來られ、「……でも之だけ御座居ますから……」と一杯ある手紙の中から一通を取り出された。

"戰鬪も一段落して、今は立派な事務室の明るいランプの下で毎日十二時頃迄頑張つてゐる、散歩と撮影の外は何時でも此處に收つてゐる（中略）乏しい材料での研究と興味の中心としてゐるのは、新しい經濟體制を裏付ける理論と支那問題殊に貨幣金融の問題だ殊に新秩序誕生に時代の貨幣現象を觀察するに便利な地位に居るのが有難い。寫眞は實に私を誘惑する、そして唯一の誘惑である。（中略）兵隊の文化生活を少し報告しよう、先づ讀物、但しサンデー毎日か講談倶樂部程度、少しよくてキング、之でも中隊の兵隊は全國一の教育程度の高い連中なのだ、だから惟えらく戰地視察の半可の通談や誇張的通信などで兵隊が娯樂雜誌等に見向きもしない等とあるのは私には信じられない。そんな文献で戰地の兵隊の要求に間違つた解釋をしてはいかん、然し娯樂雜誌丈けで充分だと思つてゐない事は事實だ。

最近恤兵品としてポータブルのいゝのがレコードと共に寄贈された、勿論レコードは軍歌と流行歌と浪花節である。其後ある人が自費で西洋音樂の通俗的なのを若干買つて來て中に混ぜて置いたら浪花節にうつとりする連中がカルメンのアリア集に喜びボレロに喝采を送る面白い現象を起した（後略）

ユーモアに富んで而も含蓄ある教授のお便りは盡きない、戰塵を落してホットした時の教授の趣味も偲ばれて、教室での面影がはつきりと思ひ出された。

ともかく先生が御元氣で御奮鬪なされてゐる事は、それ丈けで銃後の我々にとつては充分喜ばしい事である。

□□□□

子煩惱な

和田教授

お蔭樣で家族一同何一つ變つた事もありません、と元氣な樣子で、すま子夫人は出征以來二年半の間に抽斗に一杯になつた生々しいお便りの中からあれやこれやと出して下さる。

前略、只今ドウン〳〵と景氣のいゝ砲聲がして敵陣地を攻撃してゐます昨日の戰鬪にて迫撃砲彈に二三尺體をふわりと持つて行かれました、怪我なし、之より警備につく

と言ふ物猛いのがある。戰地でも忘れ得ぬのはやはり愛兒であらう。やさしいパパ振りを發揮したお便り。

元氣デスカ、オ父サンモ大變丈夫デス、オ正月ガ近ヅキ風揚ヲヤリマスカ、オ母サンノ言ヒツケヲヨク守ルノデスヨオ雜煮ヲ澤山オアガリナサイオワリ

先生への慰問袋は？　と問へば「何々を送つて呉れ」と戰地から注文をして來ますのでそれを送つてゐますの」との事、仲々平和な銃後安泰を思はしめられた。

文化團體ニュース

映畫研究會

今日映畫を觀たり語つたりする事は日常の茶飯事となつて居るが、毎週一回開催される研究會は理論・文化・技術・作品の四班に分れて映畫を飽く迄文化の對象として取扱つて居り、昨十四年度に行つた主なる事業も五月に大船撮影所見學、學内ニュース公開、六月に日活撮影所見學、海外事情研究會・山岳部との合同映畫會、立早慶明國五大學映研座談會、會長番匠谷先生と映畫を語る會、十月に日活助監督連と「土と兵隊」を語る會十一月には小學兒童映畫教育について座談會、十二月に佃島小學校映畫學習參觀等を行ひ、刊行物も第八藝術・映研パンフレット・映研PCの三つを出して仲々の熱心さである。

英語會

毎年の四大學英語劇大會に獨特の妙味を見せ、演說大會に來會外人を一驚せしむるを常とする英語會は去る十一月十四日飛行館に開かれた第十八回英語劇大會に華々しく打つて出で又もや絶讃を博した。演しものは次の如し

ユージン・オニール原作
ブランスタッド教授演出
『カディフを指して東へ』
菊池寛原作、根岸教授飜譯
シェフアー女史演出
『仇討以上』

音樂會

去る十一月十三日青山日本青年館で催された第三十回定期演奏會は先輩田中秀雄氏指揮のもとにオーケストラ演奏によりシベリウスの『フィンランド頌歌』グノーの『フアースト』ベートヴェンの『交響曲第二番』及びグリークラブの男聲合唱等であつたが、何時も乍ら大學音樂界第一流の堂々たる出來榮へであつて華麗な雰圍氣を醸し出した猶、同部は過日、日比谷公會堂での七大學音樂聯盟第一回演奏會に十三名のスタフを送りその豊かな感性と優れた技術は大いに買はれたと。

海外事情研究會

渾沌たる世界狀勢がジャーナリズムの中心的問題として取扱はれ、對外國交調整問題がわれわれの最も大きな關心的である今日、本研究會が孜々としてその成果を擧げて居るのは立教文化の一つの美しい華である。密かに聞く所に依れば研究會は目下松下教授の演習を兼ねて米國憲法の飜譯出版に著手し、又その次には米國中立法全文をも計畫して居る由、世界狀勢の中心が米國であり、米國の中心がそのリーガリズムである事から推して海研の之等の事業は必ずやわれわれの誇りに今一つを加へる事にならう。

カメラ・クラブ

十一月廿八日より十二月二日迄の五日間銀座三越のギャラリーで催された作品展は最初の學外展であつたゞけに仲々張り切つた作品が多く、斯界の好評を博したのは創立以來の捲まざる努力が時間的ハンディキャップを見事征服したものであらう。メンバーの自重自愛を祈り、滿腔の期待を送らう。

喜多謠曲會

本學の異色ある存在の一つとして早くも第三回目の誕生を迎へたが、去る十一月廿一日四谷愛住町の宗家舞臺で開かれた學生鑑賞能に『女郎花』を、十二月三日の青年會に『熊坂』を堂々連吟して日頃の猛練習の成果を擧げた。われわれ立教マンは勿論洋樂の良さを識るものであるが、邦樂の妙境にも彷ひ得るものである事を立證して呉れる同會の貴重なる活躍發展は全く小氣味が良い。

基督教青年會

全國YMCAの一部である學内基督教青年會は熱烈なる信仰の道を開拓して居る。毎週火曜日の午禱禮拜を會員が分擔司會し、三時からは高松チャプレンを中心に聖書研究を行ひ、又第二、第三火曜日夜には部室で「現代基督教概論」を鈴木牧師に學んで居る。猶同會は此外昨十四年度臨時に行つた事業として五月十日に早大理工學部長山本博士の講演『東亞再建と青年の使命』七月十日から十八日迄の東北傳道旅行、十月十日に前會長村尾先生の講演『米大陸を横斷して』十月十九日『禮拜と音樂の夕』等を扱つた。

國防研究會

戰時下國防の重要性が國民の腦裡に深く刻み付けられて居る折柄、わが學内に此種の研究團體が存する事は眞に心强く、頼もしき限りである。此會の昨年度事業は講演會四回、座談會四回、軍艦便乘四回、親睦徒歩旅行等の外、一月に『新東亞建設の夕』五月に『海軍記念日學生國防の夕』『興亞學生の夕』を夫々軍人會館に開いた。學生國防研究會聯盟の中支勤勞奉仕隊派遣には同會より四名が參加し、上海陸戰隊警備區域内の人口調査を行つたり警備に服務したりせる他、忠靈塔建設地々整作業上海・蘇州・南京戰蹟見學航空機便乘を行つたとの事。

本十五年度豫定事業としては例年通り講演會、見學等の外再び中支勤勞奉仕隊派遣及び海洋部新設を計畫中であると。猶研究費の譲定主題は下の如し。豫科『戰爭論』本科『戰爭經濟論』

書道研究會

研究會につき會員某君は語る『われわれが卒業間際になつて先づ困るのが履歴書です。此惱みを解決し併せて精神訓練をしようと云ふ一石二鳥の名案で本會は創立されましたがもう一週年になります。寺子屋式方法を捨て全く科學的習字法の發露は此間開いた學内展覽會でお分りの事でせう。それに今年の卒業會員の就職振りを御覽なさい云々。』

聖徒アンデレ同胞會

『男子特に青年男子間にキリストの御國を擴張するにあり』と云ふモットーのもとにラッシュ教授が昭和二年學内に創立してより十二年後の今日アッセンブリーは十二支部、學生會員百名を算へるに至つた。

われわれは同胞會が既に三百名の基督者を世に送り、校内の精神教化運動をより大きく社會浄化の一フアクターとする事に勉めて居る事に絶大の尊敬を持つと同時にラッシュ教授の人格と情熱が學生全般に深く觀せられ、より强固なるより活潑なるブラザーフッド・ムーブメントの將來を刮目期待するものである。先般八ケ岳山麓に開設された清泉寮は全く同教授の汗と涙の結晶であると聞くが、われわれはそのキャンプハウスがわれわれ一般學生に公開されて居る事も忘れてはならない。

販賣廣告研究會

例年學内の呼物となる立教メモの發賣――世の中がセチ辛くない時はダメ呉れたものだ――が今年はどうしたのかと思つて居たら何んと九月になつて見參した。當事者君につめ寄つたら、どうも止むを得ない事情で……。紙上を通じて學生諸君に御詫致する。七月には百貨店の實習生として汗を流して大いに商賣人勉强もし、ほろ苦い社會哲學を味はつたそうでわれわれにも教へて呉れる事が澤山あるらしい口吻であつた。

辯論部

全國を擧げての戰時々局下に我々立教マンは須く正しい認識と覺悟を確かり腹に据へなくてはならざる辯論部は十月十六日豫科百一番教室に於て陸軍省、長谷川少佐の講演『歐洲大戰と我國の立場』を皮切りに俄然活躍し出した。即ち全く新しい企劃で第一回校内辯論大會を十一月廿一日學部三十七番室で開催したり十一月二十九日木暮武太夫氏を招いて『物の經濟に就いて』の講演會を開く等多忙な秋を過した。更に對外的には本年の本學・青學・明學のミッションスクール對抗辯論大會に三名の辯士を送る筈であると。

洋畫クラブ

去る十一月十七日から十九日迄の三日間新宿日光莊ギャラリーに於て委員吉田百雄君追悼を兼ねて洋畫展を開いたが、飽く迄學生としアマチュアとしての本領を守つて良心的作品のみを見せて呉れた事は全く喜ばしかつた。特に注目されたのは吉田君の遺作であるが、技術的にも藝術的にも良き指導者であつたものを之と貴重なるメンバーの一人を失つた洋畫クラブの爲にも又本學の爲にも一しほ惜まれた

ワンダー・フォーゲル

事變下國民の體位向上が叫ばれて居る今日、此部はヴアンデルングによる體位向上を目的に一、日光を浴び自然に親しめ一、運動精神を尊び浩然の氣を養へ一、淳朴と清爽と自由とを求めて遍歷せよ

一、祖國の地理と歷史を知れ
一、祖國愛と國民精神を養へ

の五項目を掲げて活躍して居る。昨年度には毎月一回行ふヴアンデルングの他に夏期は丹澤四十八瀬左股及び右股廻行、立慶明三大學日の出山親睦登山、箱澤廻行、大嶽山登山、東鎌尾根縱走、神津牧場訪問等を行ひ冬期には妙高山蓋與羽紡ヒュッテに一週間のスキー合宿を行つたと。

戰線だより

學園關係の戰線だよりを知りたいと教官室を訪へば、壁一面に掲げられた諸先輩の貴重なニュースが生々しい香りと輝かしい光を放つて居る。其場に居られた佐藤先生に伺ふと現在學園校友で出征して居る人々は大學卒業者約〇〇名、中學卒業者約〇〇名程との事。以下來信者のお便りに御動靜の一端を紹介しやう。（順序不同）

矢野俊雄中佐
其後御起居如何に候や御伺ひ申上候。小生征途出發後此度現在地に到着致候。御蔭に依り幸に頑健御休心被下度候。（後略）

三好俊良中佐
其後は失禮しました。今度轉任しました大いにやります、皆さんに宜しく（後略）

齋藤　實少尉
（前略）先般某地作戰に參加致し輕傷を負ひ候も幸ひ全治し益々使命に向ひ邁進せんと決意仕候（後略）

富田巖衛君
（前略）…自分も九月廿日付を以て歩兵科甲幹を命ぜられました。此れより國軍の幹部として恥しからざる樣皆々樣の御期待に副ふ樣精勵の覺悟です。（後略）

小野恒雄君
（前略）…砲筒も溶かす南支にも夕日は訪れ思ひを遙かに銃後の皆樣のもとに馳せて居ます（後略）

松井武造君（舊姓黄山）
（前略）…小生東京陸軍經理學校在學中は公私共に絶大なる御聲援と御交誼を賜り厚く感謝致して居ります。（中略）當地は大行山脈の山麓にて電燈もなく又水の補充も充分ならず支那家屋に分屯して居ます共產匪〇〇軍が集結致し間斷なく銃砲聲が聞へ第一線の感を一層大ならしめます（後略）

長妻量平君
（前略）…不肖御蔭樣にて酷熱百數十度の炎天或は諸種の惡疫流行の地に於て以前に增し健全に〇〇任務を無事遂行し（中略）「炎天下百度以上の南支にて、たゆまぬ我等君をおもへは」（後略）

坂井正明君
（前略）…小生相變らず元氣一杯軍務に精勵致し居ります。去る八月一日付を以て御蔭樣で幹候の榮譽を擔ふ事を得ました。（中略）學校の皆樣、同期の連中は如何がですか、宜しくお傳へ下さい。（後略）

野村　亘君
（前略）…御蔭樣で小生至極元氣で我等の奉ずる宣撫の大任に當つて居ります。東亞新秩の目標に向ひ只邁進を續けて居ります。（中略）唯此上は大日本帝國の國威を宣揚すると共に中國民衆をして眞に日滿支提携の實を結ばせるべく奮鬪致す覺悟であります（後略）

牧野泰久君
渡滿以來既に數ケ月酷寒に身も心も縮む思ひを味ひましたのも東の間、匪賊討伐、教練、幹部候補生試驗準備に追はれて居ります間にはや此の北滿にも春が訪れました。（中略）五月一日付をもつて歩兵科幹部候補生に合格しました。經理部を第一志望と致したのでしたが志望かなはず歩兵科に廻りました。（後略）

山本義夫君
（前略）…小生も十二月入營以來今日迄元氣で演習を續けて參りましたが、現在は勇躍大陸への途にあります。帝國男子の本懷之に過ぎたるもの無く、只々死而後已むのみであります。（後略）

古川　正君
（前略）…〇月〇日海陸無事任地に到着致し候間乍他事御安心被下度候今後益々奮鬪努力以て帝國軍人の本分を盡す覺悟に御座候（後略）

鶴巻新作君
（前略）…以御蔭夙夜王事に精勵し心身共に潑溂として出動の命を拜し勇躍壯途に向ひ申候（後略）

白井仁郎君
（前略）…御蔭樣を以つて九月七日無事任地に到着致候に就いては乍他事御放念被下度尚今後共一意專心軍務に精勵各位の御期待に添ふ覺悟に御座候。（後略）

松田晃郎君
（前略）…益々自重軍務に精勵し遺憾なく帝國軍人の本分を全うし以て御奉公の誠を盡す覺悟に御座候。（後略）

遠山郁雄君
（前略）…就いては今後君國の爲一意專心盡忠報國の誠を捧げ以て銃後皆樣の御期待に添ふべく御奉公申上る覺悟に御座候。（後略）

市川行大君
（前略）…私儀出發に際しましては御懇篤なる御厚情を蒙り有難く御禮申上ます。過ぐる日萬歲聲裡に打ち振らるゝ日章旗衍する歡送の聲は胸底に焼きつき盡忠報國武威揚々一層に自重感激致しました。（後略）

青地球磨男君
（前略）…今大陸に立つて其任いや重く其責いや大なるを痛感ひしひしと胸を打つものは皆樣の熱誠溢るゝ御聲援御鞭撻であります。此上は愈々粉骨碎身以て盡忠報國の誠を致し第一線の重責を完ふし誓つて皆々樣の御期待に副ふ念願であります。（後略）

淺野　靜君
只今再び當隊に入隊致しました。元氣ですから御休心下さい。今後も一生懸命やります

榎本思堯君
甲幹合格の上航空通信の御勉學中と。

西川正夫君
目出度甲幹に合格された由。

栗田修己君
目出度甲幹に合格の上十一月一日無事入校の由。

志賀秀夫君
十二月十日目出度入營との事

遠藤治郎君
十二月一日入營されたと。

鶴岡　榮君
十二月一日入營されたと。

古川良助君
十二月一日無事入隊の由。

藤井一郎君
十二月一日入營されたと。

武者慶之助君
十二月五日甲種合格にて入營の由。

谷口四郎君
十二月一日入營されたと。

藤森正志君
二番で甲幹合格の由。

市川　温君
砲兵科甲幹に合格された由。

亀井　勇君
目出度甲幹合格の由。

袴田虎男君
十一月一日原隊より分遣を命ぜられた由。

森川利器三君
九月廿日付にて甲幹に採用されたと。

野田清暉君
一月十日入隊の由。

生田勢一君
臨時召集の恩命に浴し主計少尉として入隊された由。

内田　正君
目出度く見習士官になられたとの事。

太刀川幸夫君（舊姓森尾）
四月十三日目出度く入營された。

小林芳一君
仙臺の學校卒業後初年兵教育に當つて居られる由。

松本孝三君
一月十日入隊された由。

關口正吾君
四月十日入營された由。

村松信平君
一月十日入營された由。

加藤元治郎君
櫻井君と同棟にて時々面會される由。

河野禮三郎君
一月十日入營の由。

櫻井　享君
目出度く甲幹に合格されたと。

柴田　潔君
北滿に派遣中經理部甲幹に合格の由。

鈴木正二君
陸軍豫備士官學校卒業後留守隊付となられた由。

百瀬　浩君
大變お元氣で皆樣に宜しくとの事。

濱野正男君
目出度乙幹になられた由。

町田泰通君
目出度經理部見習士官となられた由。

長谷川正治君
毎日代々木原で猛訓練との事

柴田越二君
目下幹部候補生を志願されて居る由。

溝邊忠教君
七月廿日中支戰線より轉居された由。

渡邊理一君
軍鄉習志野の兵營より諸君の御健勝を祈ると。

加藤長久君
宇都宮で百瀬君高野君に會はれたと。

高野百介君
一月十日に入營されたと。

白井敏雄君
先輩伊東少尉殿の下に居られる由。

春日猪一郎君
甲幹合格の上、上記學校に入學されたと。

三好敏毅君
五月三日無事入隊された由。

瀬戸伊一郎君
五月四日入隊されたと。

横江基一君
目出度砲兵科甲幹になられた由。

昭和十五年一月廿五日印刷
昭和十五年一月廿八日發行（非賣品）
▽　非売兼寄會
（振替口座東京六七一三五番）
東京市豊島區池袋三ノ一、二七二
編輯兼發行人　中曾根　正三郎
印刷人　澤田文雄
印刷所　學園印刷所
發行所　東京市豊島區池袋　立教大學構内（電話目白一〇一一）財團法人　立教學院